

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月 23日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21530802

研究課題名（和文） 教育的パフォーマンスにおける伝授の両義性に関する研究

研究課題名（英文） On the equivocation of communication in educational performance

研究代表者

土戸 敏彦（TSUCHIDO TOSHIHIKO）

九州大学・人間環境学研究院・教授

研究者番号：30113096

研究成果の概要（和文）：

一般に大人の発言や振舞いはオモテ（メッセージ）とウラ（メタ・メッセージ）の両面的・両義的な様相をもつが、これは教育場面、すなわち教育者の被教育者に対する場面でも現われる。一見、教育そのものにとってネガティブに見えるこの事実は、教育行為にとってむしろきわめて重要かつ有意義な意味をもっている。というのも、そこには、コミュニケーションそのものを包むコンテキストという要素が関わっており、これがいわゆる“きれい事”ではない現実を示唆するからである。本研究を通して、このコンテキストゆえにメッセージがつねに一義的とはなりえない（教育的）コミュニケーションにおいて、教育者にはそのことの自覚と配慮がたえず要請されていることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

Speeches and acts of adults mostly have bifacial or equivocal aspects (message and meta-message) and appear in educational situation as well as usual, i.e. in acts of teachers to learners. This fact seems to have a negative sense for the education but has in fact important meanings, for the factor of "context" is concerned there and suggests that real life could not be a happy fiction. Consequently it is verified that teachers are constantly required to reflect on this matter and pay attention to this situation in educational communication where message cannot always be univocal because of context.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度	0	0	0
年度	0	0	0
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学、教育学

キーワード：教育哲学 教育的パフォーマンス コミュニケーション コンテキスト ふりメタ・メッセージ 引用可能性 意図と表現

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究テーマは、このプロジェクトを開始する直前に書かれた論文『ふりをする』

ことの伝授としての教育』（『九州大学大学院教育学研究紀要』第11号 2009）が端緒となっている。このモチーフが、本プロジェクト

全体を牽引したと言っても過言ではない。

(2) 報告者は、この数年来、独自の教育哲学的視点から〈子ども〉と〈大人〉、および両者の関係について研究を進めてきた。その際、派生的な課題として残り続けたのは、教育するに際して大人が、かならずしも確信を抱いていない規範を子どもに示す場合、いかなる態度をとるべきか、というものである。あるいは、教育という名であまたの規範が子どもに対して随順すべく提示されているが、それらの規範を大人自身は完全に遵守し、履行しているか、という疑問の形にも言い換えられる。実態は、誰もが漠然と感じているように、大人自身がかならずしも守っていない規範が、あらゆる教育の場において子どもに対して、守るべしとして示されているのである。

(3) ここに大いなる逆説が存在するように見える。すなわち、極論すれば、教育という活動には、大人が「かならずしも正しいとみずから信じておらず、あるいは実践していないこと」を、子どもに対して「正しいと信じ、実践しているかのように」示し、子どもに「正しいと信じ、実践するよう」勧めるような活動が少なからず含まれていることになる。

(4) このことは、世代的に永遠に繰り返される。もしこれが真実ならば、子どもは大人になる際に、ある種の“嘘”を発見するということになる。むしろこう言うべきかもしれない。子どもは大人の“嘘”を見抜き、それを受け入れたとき、彼もしくは彼女自身も大人になる、と。今や、彼ら自身大人としていわばその“嘘つき”の側に回ることになるのである。

(5) 果たして事情はこのように経過しているのだろうか。そして、そうだとすれば、このようなことが、なぜ、いかにして、教育の過程において生じるのだろうか。

(6) 以上のような事態が仮に存在するとして、一般の通俗的な見方からすればその事態は憂うべき社会および教育のあり方であるということになる。しかし、本プロジェクト開始するに際してそのような見方に疑義を抱いた。むしろ、そこには、教育という行為に原理的に潜在する根本構造があるのではないか、という問題意識が芽生えたのである。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、伝統的な教育研究の成果にもとづきつつも、それらがほとんど着目してこなかった、教育行為ないし教育的パフォーマンスに潜む伝授の両義性という事象に教育

哲学の観点から焦点を当てる。すなわち、オモテのメッセージが明示的に伝えられると同時に、ウラのメタ・メッセージが暗黙裡に被教育者に伝わるという両義性である。その構造とダイナミクスを明らかにすることを、本研究の第一の目的とした。

従来、教育行為については、教師の被教育者に対するメッセージという形で単相的に語られてきた。しかしながら本研究では、教育行為が、メッセージそのものに貼りついたものとしてのメタ・メッセージを含んでいると考える。これは、いわゆるホンネ・タテマエ関係とは異なった、パフォーマンスの両義性である。しかもパフォーマンスにおける両義性をなす二要素（遂行と演技）は単に対立するのではなく、むしろ相互補完的な関係にあると考えられる。このことは、現実の教育行為のあり方について再考を促さずにはいない。

(2) 両義性を有するパフォーマンスにおいてメッセージが伝達される際には、コミュニケーションにおけるコンテキストがきわめて重要な意味をもち、とりわけ教育的コミュニケーションに際してはこの点についての細心の配慮が要請される。本研究の第二の目的は、このことの究明である。

コミュニケーションにおけるコンテキストと言っても、さまざまな捉え方がある。その一つ、ベイトソン (Gregory Bateson) の言うコンテキストは、彼にあつてはメタ・メッセージを意味するが、本研究ではむしろデリダ (Jacques Derrida) が問題にしようとした意味でのコンテキストを取り上げている。それによると、コミュニケーションの重要な一要素をなすコンテキストはその本性において不確定であり、そうであるがゆえにメッセージの引用可能性という問題が浮かび上がる。すなわち、オリジナルと二次的引用との二項対立など存在せず、どんなメッセージといえども否応なくそれ自身において引用可能性を含んでいるのであり、これが、コンテキストによってメッセージがいろいろな受け取り方をされてしまうゆえんである。第二の目的の意図は、このことを教育の場面で逆にポジティブな意味合いに捉えて、教育者の被教育者へのいわく言いがたい微妙な事がらの伝達に活かすことができるのではないかという問題意識を展開することである。

(3) 以上のパフォーマンスの両義性とコンテキストの不確定性についての綿密な考察にもとづきつつ、教育者と被教育者の間のコミュニケーション、とりわけ教育者の被教育者に関わる態度、さらには総じて教育行為のあり方一般について有益な示唆をもたらすこ

とが、本研究の第三の目的である。

一般に現代はかつてと比べて教育（とりわけ学校教育）がむずかしくなっていると言われる。それには幾多の要因があるだろうが、その一つとして考えられるのが、社会（世間）と教育現場との精神的・文化的・風土的な乖離である。このような状況下において、教師は被教育者に対していかなる態度を示すべきか、たとえば社会とは別様の、教育現場にのみ通用する規範に固執するのか、それとも社会の現状を勘案し、それに応ずるような規範を体現するのか。このようなことが問われる局面にあって、その用い方次第でまさに教育的パフォーマンスの両義性は有効に作用するだろう。

こうした教育的パフォーマンスの両義性は、実は公にすべきことではなく、教育の場で“あからさまに”してはならないものかもしれない。というのも、「ウラの真理」は「知らせない」というしかたで「知らせる」ものだからである。しかし、教育学的・教育哲学的にはこの謎めいた両義性のもつ「真理」は徹底的に追究する必要がある。この分析・精査の結果として、教師・生徒の信頼関係の構築・再構築に寄与する可能性は少なからずあるからである。

3. 研究の方法

本研究では、パフォーマンスの両義性というテーマに迫るためにさまざまな手法を駆使したが、そのなかでも顕著な方法として、以下の4つを挙げておきたい。

(1) 道徳の生成に関するホップズのアプローチ

道徳は総じて、その契約（約束）を守る〈ふり〉から成り立つ。この〈ふり〉が成り立つプロセスを追究する方法としてホップズのアプローチがありうる。すなわち、「万人の万人に対する闘争」であるが、ミクロの具体的場面としては「囚人のジレンマ」がそれである。

いわゆる「囚人のジレンマ」——たとえば囚人となった私と相棒において、二人とも自白すれば二人とも10年の刑、一方が自白し他方が黙秘すれば、自白した方が釈放、黙秘した方は20年の刑、二人とも黙秘すれば二人とも2年の刑が課されるという状況——が、道徳の始源的生成の段階において参考になる。この状況において、何らかのきっかけである契約（約束）がなされ、成員たちがそれを守る〈ふり〉をし始めるとき、それが道徳の出発点である。

要するに、行為における〈ふり〉を考察するために、それを生み出す典型状況としての道徳の生成状況を想定する。そして、この構造と力学の解明にもとづいて、教育行為にお

いて一体化しているメッセージとメタ・メッセージという両義性を明らかにする。

(2) 行為と演技に関するゴッフマン的アプローチ

ゴッフマン (Erving Goffman) は件の行為を「パフォーマンス」という用語で表現した。彼によると、〈パフォーマンス〉とは、「ある特定の機会にある特定の参加者がなんらかの仕方での他の参加者のだれかに影響を及ぼす挙動の一切」であるが、これがすでにして両義性を含んでいる。

すなわち、行為者が「生真面目に」自分の行為そのものになりきっているあり方（遂行的なあり方）と、行為者が自分の行為に対して距離を置き、それを「醒めた」見方をしていくあり方（演技的なあり方）である。パフォーマンスとは、結局、この両者を含んだ両義性をもった行為ということができる。

このように、行為というものがすでに両義性をもっていると見なして、その行為を考察する視点が必要とされるのである。

(3) メッセージとメタ・メッセージに関するベイトソンのアプローチ

ベイトソンにおいて、メタ・メッセージ（当初、彼はこれをコンテキストと区別していない）とはメッセージを類別するものであり、ゆえにそれより上位の論理階型に属している。したがってそれは、メッセージに影響を与えたりメッセージを否定したりするものではない。ところが、いわゆるダブルバインドの説明に際しては、メッセージとメタ・メッセージが矛盾対立し、否定関係にあるとされる。ここにはメタ・メッセージの二義性があることになるが、本研究においてはメタ・メッセージは、メッセージの解釈の仕方の指示というだけでなく、むしろメッセージの上位レベルにおいてそれ自身ウラのメッセージとしての一定の内容を含んだもの、という理解をした。

ちなみに、コンテキストは文脈であり背景（メッセージのぶれを修正し、その理解を支えるもの）であるが、これに対しメタ・メッセージはメッセージに対して齟齬（ときには矛盾）をもたらすことを含意している。メタ・メッセージは（意図的かどうかにかかわらず発信者によって）発信されるものだが、コンテキストはそうではない。こうして、コンテキストのないメッセージはないが、メタ・メッセージのないメッセージはありうるということも言える。

メッセージとメタ・メッセージの間にズレがあるということは、行為にながしかの演技性があるということである。そしてそのことは、そもそも演技性が行為者にとってかならずしもつねに自覚的なものとはかぎらな

いことを意味する。あるいはむしろ、行為者にとって自覚的か否かにかかわらず、演技性があるとき、メタ・メッセージが生まれるのである。

以上のメッセージとメタ・メッセージの関係をめぐる方法的視点は、パフォーマンスの両義性という問題にとって極めて有効な示唆を提供する。

(4) コンテキストに着目するデリダ的アプローチ

デリダは、コミュニケーションが一義的になりえないのはコンテキストの不確定性ゆえであると考えている。というのも、いかなる記号もコンテキストから切断されることができ、したがってそこに「引用可能性」が発生するからである。一般に発話（メッセージ）は「意図」と「表現」の二項図式の上で考えられ、両者が一致しているケースが「正常」「標準」とされがちだが、だとすれば、引用されたあり方、すなわち「寄生的」な仕方を用いられた表現は二次的なものとして貶められることとなる。しかし、まず「意図」があって、しかるのちにそれが「表現」にもたらされるという構図は、一種の幻想でしかない。いかなるメッセージ（「表現」）も、デリダのいわゆる「差延作用」をもち、それぞれのコンテキストにおいてそのつどの「意図」を生み出すのである。

このような考え方ないしアプローチの仕方が教育というコミュニケーションのなかで試みられた例は管見の限り存在しないが、本研究の方法論の一つとして、教育的パフォーマンスにおける両義性というテーマの上であえて試行的に展開しようとした。

4. 研究成果

3年間に及ぶ研究の結果、以下のような事柄を研究成果として提示する。ただしその中には、研究開始当初から想定していたことを再確認したという項目もある。

(1) 人間のあらゆる行為は〈ふり〉、言い換えるなら「パフォーマンス」という面をもっている。すなわち、一方で行為が一定の目的を求めて遂行されつつも、同時に他方でそれ自体が演技として表出されるという両義的なあり方をしている。

(2) 教育という課題に際して重要なのは、（典型例としての道徳について言えば）明示的には道徳の原則を教え、そうすることによって暗黙裡に道徳に従う「ふりをする」ことを伝えるという態度である。いわば、メッセージとメタ・メッセージの曖昧な関係を踏まえた態度といえる。この態度こそが（ある意味で皮肉なことに）子どもを当該社会に参入

させ、一人の成員たらしめることに成功する。

(3) 教育者は、行為遂行のメッセージの背後もしくは上位のレベルにおいて、みずからの直接的意図にはないメタ・メッセージを発していることがありうる。そのメタ・メッセージの望ましい受け取られ方としては実質上コンテキストだけが頼りであり、教育者にはそのコンテキストへの配慮、さらにはコンテキストの形成が（わけても現代においては）求められつつある。

(4) 「引用可能性」という観点から、一般に自明の前提とされている「意図」と「表現」という二項図式それ自体の問題化を試みた。その結果「意図」は、「表現」が所与のコンテキストにおいて展開する一種の運動のなかで生み出されるものであるというユニークな仮説に行き着き、さらにそうだとすれば、これはメッセージの背後にある「意図」なるものの過大視のリスクを示唆していることになる（とりわけ教育場面において、その意義は大きい）。

(5) 道徳や教育に関するかぎり、有無を言わせぬ不動のメッセージは、かならずしも妥当なものとは言いがたい。デリダ流に言えば「差延」の運動をそこに感知しなければならぬ。すなわち常にある種の「引用可能性」をそこに見ておく必要がある。メッセージは、コンテキストのなかで微妙にうごめき、自己間隔化を伴い始める。すなわち、メッセージは額面以上の意味をもちはじめたり、あるいは逆に額面以下に縮減する、ということが起こりうる。そのことを忘却するとき、道徳や教育が不快な感触を呈示することになる。時として道徳や教育に関する言説が忌避される理由の一つとして、このような事情が伏在していると推定するに至った。

(6) 教育的パフォーマンスの両義的な意味合い（大人の振舞いや発言のオモテ・ウラの様相）が、かならずしもネガティブなものではなく、むしろ積極的な意味をもっていることを確認した。この積極的な意味とは、この世の現実がかならずしも教育目的や道徳規範の示す“きれい事”から成り立っているのではなく、はるかにフレキシブルな様相をもっているということを伝授することであり、両義性の研究を通してこのことが教育行為によって伝達されうる可能性を確信するに至った。この結論は派手やかではないが、おそらく今後の教育行為のあり方に一考を促すだろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 3 件）

- ① 土戸敏彦、コミュニケーションにおける引用可能性と教育的パフォーマンス、『九州大学大学院教育学研究紀要』、査読なし、第14号、2012、21-39
- ② 土戸敏彦、行為の両義性としてのパフォーマンス——教育的コミュニケーションへの示唆——、『九州大学大学院教育学研究紀要』、査読なし、第13号、2011、77-93
- ③ 土戸敏彦、教育の営みと実存の問いの相克——そしてそれを超えて——、『実存思想論集 XXIV 実存と教育』（実存思想協会編）理想社、査読なし、2009、57-77

（以下の論文は当該研究期間直前のものであるが、本プロジェクトにとってきわめて重要ゆえ、あえて掲載する。

- ④ 土戸敏彦、「ふりをする」ことの伝授としての教育、『九州大学大学院教育学研究紀要』、査読なし、第11号、2009、99-109

6. 研究組織

(1) 研究代表者

土戸 敏彦 (TSUCHIDO TOSHIHIKO)
九州大学・人間環境学研究院・教授
研究者番号：30113096

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし